

仏心と葬弁儀

―その1―

連載開始のごあいさつ

仏心とは、読んで字のごとく仏の心、つまり仏教で言う「大慈悲」のことを指しますが、「仏様の慈悲」というばかりではなく、本来すべての人間が持っているはずの慈悲の心をもいいます。人間がいつこの仏心に気付き、自らの中に仏様の存在を感じる事ができるかは、まさに人さまごまです。それに気付くことなく一生を終える人もいることでしょうが、仏様の存在が慈悲の心そのものであるならば、すべての人の心の中に仏様はいらっしゃるのであって、ただ本人が気付かないだけのことなのかも知れません。それでは、一体どのような時に仏様の存在を感じる事ができるのか、どのような場合に自らの仏心が目覚めるのか、例として当社の代表取締役である飛田英雄の話をこれからご紹介していきます。

今後、月に一度のペースでおよそ二年間、全24話ほどの連載を予定しています。当広告を切り取って保存いただき、連載終了後に当社までご持参いただいた奇妙な読者の皆様には、もれなく感謝の記念品を進呈いたします。広告の読後に保存しておいていただけると幸いです。

代表・飛田の転職と創業

当「丸和堂」では昭和43年7月10日の創業当時より、生活保護を受けられている世帯の葬儀には祭壇や霊柩車の利用を無料とし、3歳未満の幼児の場合は祭壇を半額で奉仕して参りました。その間、ご利用いただいた方はもちろん、行政当局などからも数多くの感謝のお言葉をいただいていたが、事情を存じない方々が「単に商売上のPR手段、サービス手法だろう」とお感じになられるのも当然のことと思います。

しかし飛田が、創業の直前まで炭鉱マンという安定した会社社員の地位を投げ捨て、まったく未経験であった葬儀社の経営に飛び込んだ理由をお読みになれば、これこそ自らの仏心に気付いたための機縁、つまり仏縁によって突き動かされた結果による転職であったことがご理解いただけることでしょう。

仏縁を知った愛児の死

親鸞上人の言葉を記したと伝えられる「歎異抄（たんにしやう）」にもありますように、「今生（こんじやう）に、いかに愛おし不憫（ふびん）と思うとも、存知のごとく助け難い」のが人間の死であります。私たちは、

最愛の者の死に直面した時、どのように受け止めればよいのでしょうか。ただひたすら嘆き悲しみ、やがて時間の癒しによって諦めるのが普通なのかもしれません。ただ、表面的にはそうであっても、残された者の心の奥底にけっして忘れることのできない想いとして強く残り、折にふれては新たな涙とともに衝き上げてくるものです。

とはいえ、残された人は何とかして悲しみの淵からはい上がり、より良い人生を求めて生きて行かなければなりません。そこで私たちは「死出の旅立ち」を美しく荘厳に飾り、花や経を手向けて浄土へと送り出し、仏様に故人の後生を見守られると信じて救いを得ているのです。

この時こそが、誰もが仏心を意識することのできる瞬間ではないでしょうか。

飛田がこのことに初めて気付いたのは創業の5ヵ月前、昭和43年2月に、当時2歳8ヵ月でかわい盛りな愛児・秀巳を不慮の事故で失った時でした。ストーブからこぼれた熱湯を全身に浴びるといって、無残な最期だったといえます。

この日から飛田夫婦の断腸の悲しみと苦しみの日々が始まったのでした。

つづく

